

日 時 : 2012 年 8 月 22 日(水) 15:30 ~ 18:00
場 所 : 塗料報知新聞社 会議室
出席者 : 窪井要((有)久保井塗装工業所)、高橋大((株)三王)、早川政男(第一塗装工業(株))、
杉山博英(アネスト岩田(株))、木下稔夫((地独)東京都立産業技術研究センター)
澤居昌廣((株)桂精機製作所)
幹事: 平野克己(日本塗装機械工業会)、倉持保雄(日本工業塗装協同組合連合会)
福田康介(日本パウダーコーティング協同組合専務理事)
オブザーバー: 久留嶋武男((株)ユーブイ・テクニカ)、工藤和幸(不二プラント工業)
事務局: 有馬弘純(塗料報知新聞社)

12 名 敬称略

***** 議 題 *****

2012 年度における環境技術分科会の活動目的、内容、スケジュール等の再確認

1. 環境技術分科会の活動目的(6 年間の行動と、今後に向けて)
前々回からの意見収集を実施し、再度改めて建設的な意見を出し合うため、当会の考えが世の中の動向と合致するのかどうか、アンケートを取ることを前回提案し、そのまとめを実施した。
サポイン活動で塗装業界の切り口で課題を抽出。この切り口の中でテーマや意見を出し合った。

(1)この業界が直面する取り組みの題材

- ①アンケートをとる(対象、内容)→テーマ抽出
- ②環境
- ③コスト
- ④技術
- ⑤グローバル

(2)参加者の意見

①高橋氏の意見

- ・ライフサイクルコストを測定し、塗装の優位性、塗装の良さ、その必要性を確認。
ライフサイクルアセスメント(LCA)視点で工業塗装を見る。
- ・塗膜、品質の「見える化」、「見せ方」を考える。
脱下請けを掲げ、工業塗装メーカーとなるために製品の出来栄や品質保証が今後重要になる。

②早川氏の意見

- ・小ロット、人材について
国内のロット塗装は小規模となり海外流出が大きい。
塗膜形成技術には熟練技術が要るが、熟練者の人材が不足している問題は大きくなっている。
- ・塗装業の魅力をアップさせるなど人材の確保につなげる取組が急務。
- ・職人技術(技能と言われてしまう暗黙知の存在)を、文書化し数値化する。
- ・技能士が優遇されるのか、マイスター制度のようなものが人材確保に影響するのかまだ不確定である。
職業としての地位向上と賃金向上が連動についても一般的な方向性が定められていない。
- ・無駄の排除でコストパフォーマンスを向上させる企業の取組みも重要である。
無駄吹き(オーバースプレー)が多くなると塗料スラッジが増え、塗装ブースへのキラー材等薬品の利用

が増すことやブーススラッジの産廃費用など増加など作業者の意識改革に努めなければならない。

(3) 工業塗装高度化協議会・環境技術分科会としての取組みについての意見

未来(例 30 年後)の工業塗装業界がどのような姿に変貌しているのかを想定し、3 年後、5 年後の活動を計画していかなければならない。

① 塗料や製品材料となる石油について

石油枯渇問題が取り沙汰されて「石油残量 47 年説」が唱えられている。何時までも今のスタイルが継続可能であることは無く塗装業界において変化していかなければならない。

② 杉山氏の意見

・日本という枠内での思慮ではなく、グローバルのなかでの日本の優位性を確立する方法を考え、進めることが当会に於いて大切である。

・現在の塗装業者(施工業者)は、『塗装メーカー』に変貌する必要がある。

塗装の性能・品質を認められる塗装メーカーとしての存在に向け課題を抽出し、シナリーを描く。

例えば、カーメーカーが、自前で塗装するか塗装メーカーに委託するかなど常に選択肢となるように、世界から塗装の注文を受けるような、そういう未来を作り上げる。

③ 平野氏の意見

・未来予測を踏まえた上、当面の課題の抽出であれば全体像と具体的目標の整合性が図れ、

第 3 者に対しても説得力が生まれる。ここ数回のブレインストーミング的な議論でかなりの問題点が指摘されてきたので、ここらで、まとめる時期と思われる。

2. 次回分科会開催予定

今後の工業塗装業界の有るべき姿(環境対応等々含む)を模索し、グローバル視点で日本国内での工業塗装を考えることを中心に、次回会合(10 月)は、5 年スパンのロードマップ(長期の大枠)と具体的なテーマを準備し、活動計画の作成を行うこととした。

第 43 回環境技術分科会 2012 年 10 月 24 日(水)13 時 ~ 17 時 塗料報知新聞社 会議室

————— 以 上 —————